よわよわ吸血鬼はこじらせたコミュ障のせいで勘違いされ続ける

石見 小夢

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

永き時を生きる孤高にして伝説の吸血鬼。気に障った相手は国ごと滅ぼす最強の魔王。

しかしその正体は、人間の女児にも劣る力しかないクソ雑魚ぼっちコミュ障であった。

目次

吸血姫の目覚め ―― 1
亡霊少女（前編） ―― 14
亡霊少女（後編） ―― 25

吸血姫の目覚め

「……飽きた」

少女は小さく呟いてから、読み終えた本をパタンと閉じた。椅子にもたれかかって大きく伸びをすると、自然とあくびが出る。

彼女の名はアストリッド・フォン・シュトリツェル。紅い瞳と真っ白な肌が特徴的な、吸血鬼（ヴァンパイア）最後の生き残りだ。

同族が滅んでしまった彼女は、二千年以上の月日をたった一人城の中で過ごしてきた。

城の中でできることといえば、とっくに読み尽くした本を読み直すことと寝ることくらい。新鮮な娯楽は一つもなく、年がら年中退屈している。

もうひとりぼっちは嫌だ。誰かと話したい、触れ合いたい。そんな欲求はずっと抱えているのだが、しかしそれができない理由があった。

――アストリッドは『魔王』の一人に数えられている。

超越的な力を持つ、人類の敵対者。もし逆鱗に触れた者がいたならば国ごと滅ぼしてしまう残忍極まりない吸血鬼。

（わたし、そんなことできないのに）

不当な評価を下されてしまっていることを嘆く。

そもそも彼女は人間どころか虫すら殺せるか怪しいくらいに非力だ。昨日も黒いカサカサと動く気持ち悪い虫を退治しようと試みたのだが、低い反射神経では捉えることができず、一日中翻弄されて終わった。無駄に疲れただけの最悪の日だった。

（というか、できたとしてもしない。わたし超善良。昨日だって害虫を見逃してあげた）

優しい性格を自認する彼女は、まるで悪の親玉のように扱われている現状を不満に思っていた。そう、黒くて速い虫だって本気を出せば倒せた。多分。きっと。慈悲深いから殺さずにおいてあげただけなのだ。

しかし、人間からすればアストリッドは魔王の一人。もし姿を現し

たならば、恐怖し逃げ惑うか全力で討伐しにかかってくるかの二択である。
戦いになってしまえば、普通の町娘と同等の力しか持たない彼女は一方的に叩きのめされるだけだ。それは遠慮したい。
結果として、アストリッドは城の中に引きこもらざるを得ない状況になっていた。
（うぅ、どうしてこうなった……）
アストリッドが悪名高き魔王になってしまったのは、悲しい行き違いがいくつもあったせいだ。それらを遡ってみれば、一つの理由にたどり着く。
それは彼女が保有する尋常ではない量の『魔力』だ。
吸血鬼の王女として生を受けたアストリッドは、人並外れた魔力の持ち主だった。魔力はこの世界の生物の力の源だ。それが多いことはもちろん好ましいことなのだが、アストリッドは一つ問題を抱えていた。
――生まれつき、身に宿った魔力を一切扱えなかったのだ。
魔法を使うことはおろか、魔力を用いて身体能力を強化することすらできない。そこらの一般人ですら無意識のうちに少しの魔力を使って体を動かしているというのに。無限に等しい量があっても完全に宝の持ち腐れだ。
ただ一つ、吸血鬼として生まれ持った『再生能力』だけは、自分が操作できなくとも勝手に発動するため使えるのだが、それができたところで死ににくいだけだ。貧弱なことに変わりはない。
そして、そのデメリットは戦闘能力の欠如だけではない。自らが内包する莫大な魔力を体の裡に隠すことができないのだ。
力の象徴であるそれを一切抑えずに誇示し続けるというのは威圧に等しい。本人にそんなつもりはなくとも、彼女を前にした生物はその気配を感じただけで怯えてしまう。
相手が勝手に自分のことを恐れてしまう状況でまともな対話など望めない。結果として、彼女は強大な力を持つ魔王であると誤認されてしまった。

（……考えても仕方ない。どうせ、どうしようもないし）
状況を改善しようと足掻いたこともあった。だが、誤解の壁は遥かに高く、むしろ悪化するだけだった。
全てを諦めて数千年の月日を孤独に過ごしてきたのだ。今更何かを変えようとする気力はない。
ため息をついて立ち上がる。読み終わった本を図書室に戻しに行った。城には数え切れないほどの冊数があるが、もうどれも見飽きてしまった。
次に読む本を選定する。まだ数回しか読んでいないものがどこかにないだろうか。本棚の隅を探していると、豪華な装飾がなされた箱が目に入った。
（こんなの、あった……？　中身は……綺麗な、腕輪）
箱を開けてみると、出てきたのは宝石が散りばめられたブレスレットであった。何故こんなものが本棚に置いてあるのだろうか。記憶を探ってみるが、それらしきものは思いつかない。
コテン、と首を傾げていると――腕輪が突然、虹色の光を放った。
（っ!?　……ぁ、これ……、思い、出した。これは……だめ……ッ）
突如蘇ってくる腕輪に関する忌まわしい記憶。あまりにも嫌な思い出しかなかったため、無意識のうちに頭の中から排除していた。
（やだ、やだ……、やめて――！）
慌てて腕輪を手放そうとするも時すでに遅く。幻想的な光はアストリッドの体を包み込んでいた。

◇

魔王の一人、ロクサス・アルフォードは非常に苛立っていた。
「何故、誰も来ないッ!!」
怒りに任せて拳を卓に叩きつける。広い部屋の中で轟音が鳴り響いた。
魔王達の会合である『夜天会議（ティーパーティー）』。普段は一年に一度、定期的に行われるのだが、今回は緊急の議題がありロクサスが臨時会の招集をし

た。
　しかし、何故か開始時刻になっても十一人いる他の魔王が誰一人来なかったのである。
「……。――チッ」
　腹立たしくはあるがこの場で荒ぶっていても意味はない。ロクサスは頭を冷やし、ため息をついた。
　元々、十一人全員が来ると思っていたわけではない。獣人（ワービースト）の獅子王、ロクサス・アルフォードは現在最も新しい魔王である。新進気鋭と言えば聞こえはいいが、古参の魔王と比べると影響力は遥かに乏しい。
　そもそも定期集会や古参の臨時招集にすら顔を出さない者もいるのだ。ロクサスが魔王になったのは百年ほど前だが、彼の就任時も含めて一度も出席していない魔王が三割ほど。
　それでも大鬼の武人や海の覇王など真面目な部類の者達ならば流石に来ると考えていたのだが、そうはいかなかったようだ。
　議題に興味がなかったのだろうか。今回の件はロクサスにとっては一大事だが、古き魔王からすればさほどの緊急事態でもなく、次の定例会議で話せばいいと考えているのかもしれない。
　とはいえ、単に遅刻しているだけの可能性もあるだろう。ロクサスは小さく舌打ちをしてから、足を組み直して再び待ち始め、
　――瞬間。室内に異常なまでの魔力が吹き荒れる。
（――ッ!?　敵襲か!?）
　即座に臨戦態勢をとる。鞘から大剣を引き抜き、盾となるように構えた。
（何者だ。まさか、例の――。……いや、いくらなんでもここに辿り着けるとは思えねぇ。ってことは……どいつかが裏切りやがったか？）
　最悪の事態を想像する。ここは隔離された空間。敵がいるのなら、それは魔王が手引きしたか、魔王自身が『敵』かの二択しかない。
　一体どの魔王が寝返ったのか。いや、むしろ全員が共謀してロクサス一人を殺しに来た可能性もある。非常に考えづらいことではあるが、それならば誰も招集に応じなかったことの辻褄が合ってしまう。

何にせよ、とにかくこの場を乗り越えることが先決だ。ロクサスは防御を固めながら敵を見極めようとする。

魔力の発生源を睨みつけると、そこには一人の少女が立っていた。

（……は？　コイツは……。待て。まさか……ッ!?）

この場に似つかわしくないように思える華奢な少女。しかしその姿をはっきりと認識した時、彼の動揺は頂点に達した。

白金色（プラチナブロンド）の長髪に血の如き紅い瞳。作り物めいた美しさを誇る怜悧な印象の顔立ち。一見、十かそこらの齢の人間の少女に見えるが、病的なまでに白い肌と口の隙間から覗く鋭利な歯がそれを否定している。

（馬鹿な、何故ここに……）

誰もが知っている御伽噺。永遠に朝が来ない森の中、闇に包まれた城に棲む、美しく残酷な吸血鬼。出会えば死、怒りを買えば国さえ滅ぶ、最強にして最古の魔王。

「永夜城の眠り姫（スリーピング・ナイトメア）……」

思わず戦闘態勢を崩してしまうほどに、ロクサスは驚愕していた。

吸血鬼、アストリッド・フォン・シュトリツェル。最恐とも謳われる最も有名な魔王だが、実はこれまでロクサスは彼女と会ったことがない。基本的に自分の領土から出てくることがなく、最後に姿を現したのは実に五百年前。棺の中で眠り続けていると噂されている。故についた二つ名は『永夜城の眠り姫（スリーピング・ナイトメア）』。ロクサスが魔王に就任して百年、一度も定期的な夜天会議（ティーパーティー）にすら顔を出さなかった。

会ったことがないのに、どうして目の前の少女がアストリッドだと分かるのか。それはあまりに愚問だ。一目見て、否が応でも分かってしまう。

特徴的な容姿もさることながら、着目すべきはその圧倒的な魔力。

ロクサス・アルフォードは魔王である。新参ではあるものの、武闘派を自負している彼は桁違いの魔力を保有している。古参の魔王の中には今の彼では太刀打ちできないような者もいるが、それでも理解のできる範疇だった。

――だが、コレは違う。そもそも生物としての格が違う。戦いにす

らならないような絶対的な差があると本能で感じ取っている。確かに、この少女は紛れもなく最強の魔王なのだ。
（……待て。なぜ俺様は今生きている）
ここで初めて湧き出た疑問。ここまでの魔力を纏っているということは、相手はロクサスに攻撃を行おうとしているはずである。だというのに彼は今無事だ。感じた力の差からするとこれはおかしい。無防備な体を晒した自分など瞬く間に殺せるはず。
改めて彼女を見てみると、冷たい表情で射貫くような視線を送ってきてはいるものの、動こうとする気配はない。まるで戦う意思がないようだ。
（ハッ、襲う気はないとでも言うつもりか？　これだけの魔力を放っておいて）
脳裏に浮かんだ可能性。馬鹿らしいと感じるが、研ぎ澄まされた勘はそれが正解だと告げている。そもそもアストリッドが襲撃者だというのは、強大な魔力から連想しただけの想像だ。
ここまで攻撃の姿勢を見せないということは、本当に彼女は敵ではないのだろう。
（……ってことはなんだ。まさか、これが普段通りってか？　笑えねェな）
攻撃魔法の準備でも一時的な身体強化でもない、ただ自然に纏っているだけの魔力量がこれほどの規格外。
一周回って一種の清々しさを感じるほどのレベル差だ。最早ここまで来れば警戒も抵抗も無駄だろう。ため息とも失笑とも取れるように小さく息を吐き、手に持った大剣を鞘に収める。
「……もう時間だ。さっさと座って話を始めようぜ」
何事もなかったかのように。平静を装って席に座ったロクサスは、アストリッドにも着席を促した。
あくまでも魔王は名目上対等。宣戦布告もない状態で一方的に殺しにかかっていいものではない。たとえ虚勢であっても舐められないように振る舞わなければならないし、それができたなら向こうも簡単には手出しできないはず。取り繕うことに意味がある。

ロクサスは必死に自分に言い聞かせ、会議を進めようとしていた。

一方その頃――

（無理！　超無理！　死ぬ！　やだ！　おうちにかえして!!）

アストリッドはビビり散らかしていた。

ライオンに睨まれた小鹿のように怯えているが、それも仕方ない。目の前にいるのは自分とは違う本物の魔王。鍛え上げられた筋肉から繰り出される攻撃をくらったらひとたまりもないだろう。というかデコピン一発で頭が消し飛ぶ。

誰とも関わらず慎ましく生きてきたというのに、どうしてこんな目に遭わなければならないのか。

アストリッドが本棚で発見した腕輪は、魔王の証であると同時に夜天会議（ティーパーティー）への転移用魔道具であった。普通の魔道具であればアストリッドには扱えないのだが、この腕輪は少々特別で勝手に魔力を吸い取って作動するようになっている。

アストリッドには制御できず、召集があると強制的に魔王とかいう化け物集団の中に放り込まれる呪いのアイテム。危険すぎて封印していたのだが、あまりに使わなさすぎて封じたことすら忘れてしまっていた。

（というか、どうしてさっき剣構えてたの？　言うこと聞かなきゃ殺すってこと……？）

地獄に放り込まれたような絶望を感じている彼女には、自身の持つ膨大な魔力を警戒されたという発想がなかった。脅されたのかと内心震えながら、ロクサスの言葉に従って席に着く。

「すぐにでも本題にいきたいところだが、その前に自己紹介が先か。俺様はロクサス・アルフォード。百年ほど前に魔王になった。若輩者だが、宜しく」

「……」

次はお前の番だとばかりに睨んでくるロクサス。慌ててアストリッドは返答しようとするが口が動かない。その原因は、恐怖で委縮しているだけでなく、

（あ、えっ、えっ、ど、どうしよう……。あの、えっと、とりあえずなにか言わないと……っ）
根本的にコミュニケーション能力が死んでいた。心の中ですらそこまで慌ててどうするというのか。
だが、それも無理はない。彼女は長年引きこもっており、最後に誰かと話したのは何百年も前のことである。独り言ですらたまにしか言わないのだから、もはや発声も怪しくなっていた。
「……」
口が動かない。何かしら喋ろうとしているのだが、身体が追い付いて行かない。それならばせめて愛想笑いをしようとするが、表情の作り方すら忘れてしまっている有様。目がわずかに細まり、口の端が引きつった程度だった。
「あー、アンタはアストリッド・フォン・シュトリツェルでいいんだよな？　最強の魔王サマって噂の」
「……ちっ、ちがっ……」
そんな物騒な存在ではないと勢いよく訂正しようとするが、相手の言葉を否定するのが怖くなり、徐々に声が小さくなってしまう。最初の一音しか聞き取れなかったため、ロクサスは舌打ちをされたと思い込んでいるが、彼女は勿論それに気がついていない。
「話を進める。今回の用件だが……。まず、アルキスの奴が死んだ」
プレッシャーに耐えかねて、ロクサスは本題に移った。
（アルキス……？）
こてん、と首を傾げるアストリッド。頭の中のデータベースを検索しても、該当する名前の人物は出てこない。
「……誰？」
思わず声に出してしまう。
ロクサスは一瞬呆然とし、顔が引きつった。冗談で言っているのかとも思ったが、冷たい目ながらもキョトンとした表情を見て、本気だと悟る。
「一応、招集理由に書いたハズなんだがな……。まあいい。アルキスは俺様と同時期に魔王になった蟲人（インセクト）だ。無意味に人間を虐殺して〃

殺戮の狂王（デスサイズ）〟とか自称してた、まあ言っちまえば小物だな」
（小物……）
魔王になるほどの実力者で思想も危険な相手への呼称は、アストリッド基準では化け物以外にないのだが。それを小物扱いできるこの魔王は一体どれだけの規格外なのか。アストリッドは遠い目になる。
「――そいつが先日、人間に殺された。……勇者以外の人間に、だ」
「は……？」
「アルキスは小物っつっても雑魚ってワケじゃねえ。偶然程度で負けることはまずあり得ない。つまり、人間共に〝英雄〟とか呼ばれてるソイツは、聖剣抜きで魔王を倒せる実力を持っているってことだ」
人間の持つ戦闘能力は基本的に魔族よりも低い。そのため群れて戦うことが多いのだが、唯一例外と呼べる者がいる。それが『勇者』だ。旧き神によって造られた『聖剣』に選ばれた勇者は、並の魔王をも上回る力を得る。――そこまでは、常識だ。
だが、その『英雄』とやらは、聖剣という特別な理由もなく魔王を撃破してしまった。これは、古い知識しか持たないアストリッドだけでなく、現代の事情に精通しているロクサスから見ても異常なことである。

「んで、今日はその対策を立てたい」
引き締まった顔で議題を告げたロクサス。しかし彼は同時に心の中でため息をついていた。
（イマイチ反応がよくねえな……）
魔王に敵対し打倒する能力がある者を野放しにしておくわけにはいかない。態度とは裏腹に慎重な性格のロクサスは不安要素を少しでも消すべく魔王に集合をかけたのだ。
しかし、実際に召集に応じたのはアストリッドただ一人。そのアストリッドも英雄にさしたる興味はないらしく、無表情は動かない。それどころか退屈だと言わんばかりに目を細めている。その程度の存在、自分の脅威にはなり得ないという自信の表れだろう。これでは有

意義な対話など望むべくもない。
（いや、待て。無関心……？　だったら何故、コイツはここに来た――？）
　違和感から湧き上がる疑問。夜天会議（ティーパーティー）に滅多に顔を見せない彼女が、どうして今回に限って出席したのか。初めは英雄のことをそれほど重く見ているのかと考えたが、実際には注目するどころか存在すら知らなかったのだ。明らかに彼女が来る理由がない。
　内容以外で彼女の興味を引く要素があるのか。普段との違いがあるとすれば、招集したのがロクサスであるという点。
（ッ！　まさか、アレに関係があるのか？）
　可能性に思い当たる。もしも信頼できる古参の魔王が来たならば相談しようと思っていた事柄。どこからかそれを嗅ぎつけてきたのだろうか。
　情報が足りず、それ以上の推測もままならない。ロクサスにできるのはただアストリッドを見つめることのみであった。

　当のアストリッドはというと、
（こわい、やだ、しにたくない……っ）
　めちゃくちゃ怯えていた。裏で考えていることなど勿論ない。表情が変わっていないだけで心は動揺しっぱなしである。対策などと言われても、知力・武力・権力の全てがない彼女にできることなど一つもない。もし『英雄』が積極的に魔王討伐を狙っているのだとすれば、抵抗できずにただ叩きのめされるのを持つだけとなる。
（つ、次に狙われるのはだれなの……？）
　この吸血鬼、保身で精いっぱいである。仮に他の魔王が先に英雄と戦うならば、その隙にどうにかして身を隠そうと考えた。
　ロクサス相手に発言をするのは怖いが、質問しなければ進まない。アストリッドは覚悟を決めて口を開く。
「次は？」
（次は、だと……!?）

彼女の言葉にロクサスは凍り付く。英雄に対して興味がないように見えるアストリッドが『次』について聞いた。となればそれは、さっさと次の議題を言えと催促しているに他ならないだろう。ロクサスは確信した。彼女は例の件に気づいていると。

真相はコミュ障故のただの言葉足らずなのだが、アストリッドの伝説を恐れるロクサスはそう信じ込んでしまった。

（こうなりゃしらばっくれても無駄か。正直喋っていいか悪いかもさっぱりわからねえが、言うほかないな）

相手は格上の魔王。下手に虚勢を張りすぎて機嫌を損ねてしまうのはマズい。ロクサスは素直にアストリッドの意思に従うことにする。

「……先日。俺様の領土で旧神文明時代のものと思われる遺跡が発見された」

「……？」

「軽く調査はしてみたが、なんの施設だったのか全く分からねえ。何か知ってることがあれば教えてもらいたい」

「???」

何の話だろうか。アストリッドは急に文脈を無視して謎の告白をしたロクサスに懐疑の視線を送る。端的に言って意味が分からない。どうして化け物への対策の話から遺跡の話に飛ぶのだ。アストリッドは混乱した。

しかし、いくらなんでも何も考えなしに言ってきたわけではないだろう。ここで下手な返しをすれば意図を解さなかったとしてロクサスに怒られるかもしれない。命が危うい。

一体彼は何を意図したのか、読み取らなければならない。アストリッドは生命の危機に追いやられ、急激に脳細胞を働かせ始めた。

まず、いくらなんでも先ほどまで話していた人間の英雄と全く関係ないということはないだろう。そして、彼の言葉は自分に対する要望であった。

（そ、そっか、わかった！）

アストリッドの灰色の脳細胞は一つの答えを導き出した。
（これは取引。もし遺跡に関する情報をくれれば、わたしを英雄から守ってくれる、ってこと……！）
残念ながら不正解である。脳細胞は死滅していた。しかし彼女は間違った結論をもとに思考を進めていく。
これは取引であっても半分は脅しである。もし仮に彼女がこれを断ったとすれば、アストリッドが英雄に襲われる事態になったとしてもロクサスは一切の助力をしないということになる。見捨てられれば終わる。実質的に、受けないという選択肢はないのだ。
かといって、いくらなんでも情報が少なすぎる。確かに彼女は古い時代の知識を持っている。だが流石にノーヒントで遺跡の正体など当てられるわけもない。となれば、直接見に行くほかないだろう。おうちから出て魔王の支配領域の正体不明な遺跡に行くなど恐怖でしかないが、断れば待っているのは破滅なのだ。アストリッドはなけなしの勇気を振り絞る。
「直接、見たい」
「ッ！　……そうか、わかった」
間違いない、アストリッドの目的は遺跡だったのだろう。ロクサスは確信した。彼女が遺跡を見に来るというのは、つまりロクサスの領土にあの伝説の魔王が足を踏み入れるということ。警戒せずにはいられないが、下手に抵抗するよりも意に沿うようにした方が丸く収まるはずだ。
「一月後、迎えの者を出す」
アストリッドは頷き、すれ違ったまま両者の合意は成立した。
「今回の夜天会議（ティーパーティー）はこれで終わりだ。また来月に」
ロクサスは集会の終わりを宣言する。英雄対策について何も話せなかったのは痛いが、どの道相手を見下しているであろう彼女からはまともな案が出てくるとも思えない。下手に長引かせて藪蛇になるのは避けるべきであり、早めに切り上げるに越したことはない。
二人の魔王は各々の領地へと戻っていった。

◇

（か、かえってこれた……）

沸き起こる安堵。猛獣と一緒の檻に入れられたような、常に危険と隣り合わせの時間だったが何とか乗り切ることができた。自分が立っているのが見慣れた我が家であることを確認し、安心して涙が出てきそうになる。

しかし、ひとまずの安全の代償に危険な約束をしてしまった。どうすればいいのか、怯えながら考え込む。――その時、ふと視界の端で何かがちらつくのが見えた。

その方向に顔を向けると、

「っ!?」

そこには、一人の少女が立っていた。

（……は？　え、だれ……!?）

想定外の出来事に大きく混乱する。当然のことながら、この城にはアストリッド以外の生命体は存在していない。人間などいるはずがないのだ。

ロクサスの使者？　いや、そんなわけがない。いくらなんでも早すぎる。どうして入ってきた。どうやって入ってきた。まさか、彼が警告していた……。アストリッドは緊急事態を前に、思考を停止して立ちすくんでしまう。

この日、最後の吸血鬼が棲む城に、二千年振りの侵入者が現れた。

亡霊少女（前編）

（に、逃げないと、ころされるっ）

侵入者と対峙したアストリッドは即座に逃走の選択肢を思い浮かべた。わざわざこんな場所に来た以上、狙いは彼女の首なはず。最強の魔王に挑みに来るような相手と戦って生き残れるわけがない。

脇目も振らず逃げようとしたが、しかし体は思うように動かなかった。恐怖で固まってしまっているのだ。このまま死ぬしかないのかと絶望しかけたところで、あることに気がつく。

（震え、てる……？）

どうしてか、相手の少女もアストリッドを見つめるばかりで動かないのだ。そればかりか、瞳に涙を溜めて冷や汗を流し、手足も震えているように見える。それはまるで今のアストリッドの鏡写しのようだった。

（わたしが怖いの？）

冷静になって観察してみると少々おかしなことに気がつく。少女は何の武装もしておらず、身に着けているのボロボロのドレスのみ。伝説の魔王を倒すにしては随分と貧相だ。少なくとも戦いに来たわけではないらしい。

――そこまで思い至ったのと、少女がアストリッドに背を向けて逃げ出したのはほぼ同時の出来事だった。

呼び止める暇もなく駆け出していった彼女は、何故かドアの方ではなく壁のある場所へ向かっていく。どうしてと思考を巡らせる時間もなく少女は壁に当たり、そのまますり抜けていった。

（っ！　……まさか、幽霊（ゴースト）？）

少女の正体に思い至る。

どうやって生物に害のある瘴気を発する森を抜けてこの城までやってきたのかと思っていたが、幽霊（ゴースト）だったのならば納得できる。幽霊は未練を抱えて死んだ者の成れの果て、最下級の不死者（アンデッド）だ。

そしてそれならば逃走を図ったことの説明もつく。単純な話、幽霊は弱いのだ。体はすり抜けるため物理的な干渉はできず、魔力は存在

の維持に使う為魔法も基本的に扱えない。ただそこにいるだけの無害な存在。普通の少女程度の力しかないアストリッドの方がまだできることが多いというレベルだ。

しかし、だからと言って油断はできないのが現実。特例として生前が優れた魔導師であればそこそこの戦闘能力は保有しているし、仮に少女が普通の無力な幽霊だったとしても強い仲間がいる可能性だってある。もし件の英雄が斥候として放ってきた等であれば即座に尻尾を巻いて逃げなければならない。

（ど、どうする……。隠れるべき……？　で、でもわたし魔力で目立つから、隠れても意味ない……）

部屋の中でオロオロするアストリッド。ずっと安全な城に引きこもっていた彼女は侵入者への対応など考えたこともなかった。とるべき行動がわからない。

というか、そもそもあの少女が敵なのかすらもわからないのだ。もしかしたら偶々迷い込んでしまっただけなのかもしれない。

何にしてもとにかく情報が足りないのが致命的だ。このままここにいても何も判断できない。

アストリッドは決断する。

（……幽霊と、話しに行く）

アストリッドを見て逃げたのだから、少なくとも向こうに戦う意思はないということだ。問答無用で攻撃されることはない、はず。

大丈夫だと自分に言い聞かせながら少女が逃げていった方へと向かった。

◇

気がついたら廃墟に一人立っていた。それが幽霊少女――ロリーナの最初の記憶である。

元々人間だった自分が死に、そして不死者（アンデッド）となったことはなんとなくわかった。けれど、魔物として蘇った代償からか、彼女からは生前の記憶がほぼすべて失われていた。思い出せたのは自分の名前。そ

して、
「逃げ……ないと……」
そうだ。自分は何かから逃げていた。あの途轍もなく恐ろしいものから逃げて、逃げて。■■■を守らないと……。
「……ッ」
急にズキっと頭に痛みが走る。もやがかかったようでうまく記憶を引き出せない。あれ、今何を考えていたんだっけ。
うずくまっていると突然耳障りな音が聞こえてくる。
「ｋｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒ!!」
「っ!?」
跳ねるように顔を上げ音の出所を見ると、そこにいたのは異形の怪物だった。原始的な恐怖を呼び覚ましてくるような、冒涜的な姿。
同時に浮かんでくる記憶。『アレ』に捕まってはいけない。思考すると同時に彼女は走り出していた。
――逃げろ
――逃げろ
――逃げろ
自分の声が聞こえてくる。重苦しくて、縋るような声。
幸い、彼女の足は速かった。幽霊（ゴースト）の身軽さゆえだろう、はっきりとは覚えていないものの生前よりも遥かに容易に逃げられている気がする。
しばらくするとどうにか振り切ることができたようで、後ろを見てもあの怪物はいなかった。ほっとして一息つく。
ひとまずの安心を得てその場に座り込んだ。恐怖と緊張と疲れが重なり、軽くえずく。生身の体を持たない彼女には吐き出すものなどありはしないが。
落ち着いてから不安に襲われる。自分は何者だったのか。これからどうしていけばいいのか。わからないことばかりで泣き出してしまいそうになる。
「どうしよう、■■■……」
うつろな目で星空を見上げ、小さくつぶやく。精神は極限まで追い

詰められていて、自分が誰の名前を呼んだのかもよくわからなかった。そのまま寝転がろうとしたところで、

「ｋｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒ!!」

「……うそ」

耳を引き裂くような不快な音。絶望の化身のような姿が近づいてくる。

――逃げろ

疲れた体に鞭打って、その場を全力で離れる。逃げて。逃げて。逃げて、その先に何があるというのか。けれど、諦めることは許されない。永遠にも等しき鬼ごっこが幕をあげた。

それからいくつもの日々を超えて、どうにかロリーナは生き残っていた。怪物は一種類ではないようで、空から、地中から、あらゆるところ場所で襲われた。

四六時中追われているわけではない。たまには数日間何とも遭わない日もあった。しかしそれも、いつ新たな怪物に見つかるかずっと警戒していなくてはならない苦痛な時間に変わりない。彼女の心はどんどん擦り切れていく。

そして。奇妙な森を見つけたのは、彼女が幽霊（ゴースト）として目覚めて五年ほどが経った頃だった。

一日中真っ暗で生き物の気配を感じさせないその場所では、不思議なことに異形の怪物が一切現れなかった。

どうせ偶々見つかっていないだけだろう、最初はそう思っていた彼女も一月ほど経った時点で朧げながら理解してくる。どうやら奴らはこの森に入ってこれないらしい。

心に余裕が出てきたロリーナは森の探索を開始する。普段ならば不用意に動くことなどできないが、今は自由でいられるのだ。あるいは推測が間違っていて怪物がここに現れたとしても、それでもいいと思っていた。生きることに少し疲れてしまっていたから。

三時間くらい歩いただろうか。彼女は不思議なものを発見した。巨大かつ豪華な、死の森には不似合いな綺麗な城。間違いなく初めて見るそれをロリーナはどこか懐かしく感じる。ひょっとしたら生前、似たようなものを見ていたのかもしれない。

彼女は好奇心から城の中に足を踏み入れる。中はやはり外観と同じように豪華で、同時にどこか生活感があった。

（誰か、住んでるのかな）

城の持ち主に思いを巡らす。あまり掃除がされているように見えないから、家主は少しずぼらなようだ。

扉を開けて次の部屋に行くと、そこは図書室であった。森の落ち葉よりも多く感じるような、おびただしい数の本。圧倒されて立ち尽くす。

――次の瞬間。ロリーナはこの城に入ったことを心の底から後悔した。

「っ!?」

そこに現れたのは一人の少女だった。白金色の綺麗な髪をなびかせる、人形のように美しい年下の女の子。

一見すると人畜無害な人間の子供だが、本能が全力で警告を鳴らす。あの異形の怪物たちなんかよりも遥かに、比較にならないほど恐ろしい存在だ。直感的に理解する。

彼女を射抜く紅い瞳の視線。絶対的な存在感。死の具現化のような恐怖の塊。これは何と表するのか。適当な言葉があったはず。それは。そう、

（魔王……！）

冷や汗が体中を伝う。体が震えて動かない。どうすればいい、どうすれば。

――逃げろ

そうだ、逃げろ。常識外の魔王から背を向けて全力で駆け出す。それは彼女の体に染みついた行動だった。

しかし、想定外の事態が発生する。いくつかの部屋を抜けたところで現れた壁にぶつかったのだ。それは彼女にとってあり得ないこと

だった。実体を持たない幽霊（ゴースト）となった彼女が『物』に阻まれるなど起きるはずがない。
何度も壁をすり抜けようとする。けれど押してもぶつかっても越えられない。早く、早く。焦りと恐怖が判断力を狂わせる。
永遠のように長い時間、あるいは数分が経過したころ、後ろから小さな足音が聞こえてきた。
「その壁は、魔力を通さない」
端的に告げる小さな声。魔王から発せられたそれは、死刑宣告に等しい響きを持っていた。
そうか、幽霊（ゴースト）は魔力の塊のような存在だ。それが遮断されるならば通れる道理はない。ロリーナの頭はどこか冷静で、同時に諦めの境地にいた。
やるならさっさと殺してくれ。その瞬間を今か今かと待っている。ついに死んでしまう。ようやく死ねるのだ。いやだ、死にたくない。もういい、終わりたい。だめだ、まだやらなきゃいけないことが。
混乱する中でズキズキと頭が痛みだした。どこかでこんなことが前にもあったような、既視感が溢れてくる。
（魔王……。そうだ、私、こうやって『魔王』に追い詰められて殺されたんだ）
失われた記憶が断片的に戻ってくる。脳裏に浮かぶのは人間だった少女を殺害した、蟲の容貌（カタチ）をした魔王。その姿が今目の前にいる化け物と重なって見えた。
二度も奇跡が起きるなんてありえない。今度死ねばもう復活することはできないだろう。
「いやだ……やめて……」
震える声で懇願する。恐怖が抑えられない。涙が瞳にたまり、失禁するような感覚を覚える。
そんなロリーナの哀れな姿を見ても眉一つ動かさない魔王は、無表情のままに小さく口を開く。
「誰」
「……っ」

簡潔な質問。あまりにも短く曲解の余地が残されていないが故に、誤魔化すことなど許さないという圧力を感じる。あるいは答えなどどうでもよくて、ただ落ちていたゴミを消す前に一応聞いておいたくらいの腹積もりなのかもしれない。
「ぁ、……えっと……、ろ、ロリーナ、です。」
なんとか絞り出した名前を聞いて黙り込む魔王。気のせいか表情が少しだけ険しくなったように見える。望む答えではなかったのだろう。しかし彼女には過去の記憶がないのだから、これ以上何も話すことができない。
「わ、私……、ここが、貴方のものだと知らなくて……っ。ごめんなさい、ごめんなさい……っ」
顔色を窺うように、ただひたすら謝り続ける。そのみじめな様子に呆れたのか、魔王は一つため息をついた。
「なら、なんで来た？」
「……その……。私、追われていて……っ。ずっと逃げてたら……ここにたどり着いたんです」
「追われてた……？　誰に」
「それは……」
つい先ほど思い出した、その名前。生前のロリーナを嬲るようにして殺した、異形の怪物たちの親玉。

「――アルキス。魔王、アルキスです……」

「……アルキス？」
しまった、とロリーナは思う。今までの無感情とは明らかに違う反応。それもそのはず、もしも目の前の存在が彼女の想像通りに魔王だったとしたら、アルキスとは仲間であるかもしれないのだ。
ここに逃げ込んでしまった時点で詰んでいた。ロリーナは自らの不運を呪いながら、目を閉じて殺される時を待つ。
しかし、その瞬間はいつまで経っても訪れなかった。
「アルキス……。アルキス……？」

目を開けると魔王は少し眉を寄せて、ひたすらその名前を呟いている。それはまるで何かを思い出そうとしているかのようだった。明らかに様子がおかしい。少なくとも、ロリーナに敵対するような雰囲気はない。

数秒経って、彼女はポンと手をたたき、

「……あぁ。アルキス……あの小物魔王」

涼しい顔で言い放つ。

あの悪意の体現者を小物扱いするとは、彼女はどれだけの規格外だというのか。戦慄が止まらない。――けれど、本当の衝撃はそのすぐ後に訪れる。

「それ、最近死んだ、らしい……」

「……え？」

理解できない言葉を聞いて小さく声が漏れた。

今何と言ったのか。死んだ？　アルキスが？　信じがたい、どころの話ではない。

その手下たちの恐ろしさはこの五年間身をもって味わっていたし、生前に対峙した際に見た強さは伝説の勇者ですら太刀打ちできないのではないかと思うほど凄まじかったのだ。

？を言っているのではないかと一瞬疑ったが、魔王は驚くほど自然体で騙そうというような気配は全く見受けられない。まるで取るに足らない他人事のようだ。いや、事実そうなのだろう。超越的な力を持つ彼女にとってはアルキス如きが死んだ程度、瑣事でしかないのだ。

そしてその言葉を裏付けるように、実際ロリーナはここ一か月彼の配下から襲われていなかった。森の特異性によるものかと考えていたが、指揮官が死んでいたからだというのならそちらのほうが説得力がある。

（あの怪物が、死んだ……）

張りつめていた糸が切れたようにその場にへたり込む。終わりの見えない逃走劇から解放された。実感が湧かない。白昼夢を見てい

るかのような気分だ。目の前に恐るべき魔王がいるのも忘れ、茫然としてしまう。
そんな姿を冷たい視線で見つめる彼女はゆっくり口を開き、
「どこから来た」
「っ！　私が、ですか……？」
突然投げられた質問に慌てて返事をすると、彼女は首肯した。
「私、幽霊になる前の記憶がなくて、なった後はずっと逃げてたので、わからない、です……」
「……」
正直に答えると、魔王は考え込むような姿勢で沈黙した。
どういう意図の質問だったのか。まさか勝手に城に入った罪で故郷を滅ぼそうとでもしていたのではないか。暗い想像をしていると、魔王は驚きの一言を放った。
「なら……ここに、住む？」
「……え？」
その言葉はあまりにも突飛すぎ、思わず声を上げてしまう。
「そ、それは、どういう……」
「行くところ、ある？」
「……ありません、けど……」
ロリーナは混乱する。それは一体、どういう思考回路から出てきた発想なのか。どうしてそんな、親切にしてくれるのか。
と、ここでロリーナは気づく。
（そういえば……、この人、一度も私にひどいことしてない）
不思議なことに、言葉でも力でも、攻撃しようとしてくる気配がないのだ。害するつもりなら、腕の一振りでも存在を消し飛ばせるほどに力の差があるというのに。
（もしかして、敵じゃ、ないの……？）
訳を探して思い至る。何年も怪物に追われ続けていた彼女からすれば発想の外であったが、一度思いついてみれば至極当然の理由。
いや、そもそもこの少女のことを何故恐ろしい魔王だなどと思った

のか。確かにその膨大な魔力から読み取れる強さは並外れたものだが、それ以外はどう見ても普通の女の子である。
（そっか。私、人と会話するの初めてなんだ……）
思い返してみれば、幽霊となってから彼女が出会った相手は、問答無用で襲ってくる怪物だけであった。攻撃されて逃げる以外のコミュニケーションをとった経験がなかったため、無意識のうちに彼女のことも敵であると決めつけてしまっていたのだろう。
けれどそれは違った。ただただ親切心で事情を聴いてくれていただけなのに、勝手に怖い人だと思い込んで怖がってしまった。申し訳なくて、恥ずかしい。
しかし同時に疑問が残る。経緯はともかく結果として無断で入り込んでしまったロリーナに対して、あまりにも優しすぎる気がしたのだ。
「どうして、見ず知らずの私によくしてくれるんですか……？」
「……。……ロリーナが、わたしに、似てたから」
「似てる……？」
予想外の言葉に驚いて聞き返す。少女は少し考える様子を見せてから、おずおずと語った。
「……わたしも、弱くて、一人ぼっちだから」
小さな声でそう告げる彼女に、ロリーナは困惑する。
（弱い？　この人が……？）
少女が無表情なのもあり冗談を言っているのではないかと思ったが、何かが引っかかる。
（そういえば、この城、なんで他に人がいないんだろう……）
逃げる過程でいくつもの部屋を見たが人影はなく、今も気配を感じない。この城は広く、明らかに大人数で生活することを想定された造りだというのに、これは不自然だ。出払っているにしても限度があるだろう。どうして彼女一人しかいないのか。
（弱い、一人ぼっち……。もしかして）
ロリーナは考察し、閃いた。
（ここには元々たくさんの人が住んでたけど、敵に襲われて皆亡く

なって。この人は敵から仲間を守ることができなかったから、自分のことを『弱い』って言ってるのかも）

そう考えれば辻褄が合う。明らかに少女一人が使うには多すぎる生活用品がこの城には存在した。かつては他にも誰かがいたことは間違いない。それが何故いなくなったのか。死んでしまったと考えるのが自然だ。

ここに来る途中のことを思い返す。城の周りの森には動物が一切おらず、植物も枯れているものが多かった。今考えると、あれは敵との戦いによるものだったのではないか。豊かな森が破壊されていく凄絶な光景が想像できる。

この少女は生き残った。最終的に戦いには勝利したのだろう。けれど、その時にはもう仲間は誰もいなかった。

正面に立つ背の低い少女を見つめる。彼女はずっと無表情で、大きく感情を動かすような様子は一度も見せなかった。単に興味を持たれていないだけかと思っていたが、もしかすれば大事な人を失ったことが傷となり、心が凍ってしまったのかもしれない。

そう考えると少しだけ親しみが湧いてくる。こちらを見る彼女の表情は変わらないけれど、どこか寂しそうに見えた。

もともと自分は記憶喪失であり、アルキスから解放されたとしても行く当てなんてない。ならば、彼女の誘いを断る理由もないだろう。

「お名前を、教えていただけますか」

「……アストリッド」

居住まいを正し、礼をする。

「アストリッド様。不束者ですが、これからどうぞよろしくお願いいたします」

こうして、二千年の孤高を貫いた最後の吸血鬼の許に、初めて配下が加わったのだった。

亡霊少女（後編）

（友達が!!　できた!!）

アストリッドはウッキウキであった。

普段通りの無表情なれど、拳を突き上げて全力で喜びを表現している。それもそのはず、彼女を苦しめていた二千年の孤独から遂に解放されたのだ。

ロリーナが城に来てから数日。彼女は幸せの絶頂にいた。

（誘ってよかった。あの時のわたし、超天才……！）

爆上がりする自己肯定感。かつてない興奮がさめやらない。

ロリーナと会話し始めた当初はおっかなびっくりであったのだが、どうやら来た目的が自分の討伐ではないとわかってからはもう仲良くなることしか頭になかった。何せここはマイホーム。かつて人間の国を訪れた時とは違って、囲んでボコられるようなことは起きようがないからだ。仮に失敗したとしてもリスクがない、完璧な判断だった。

（……初対面の相手を同居に誘って成功。わたし、もしかしなくても……、友達作りの達人？）

どこまでも調子に乗るアストリッド。

もちろん実際は精神が限界だったロリーナがチョロすぎただけである。いや、弱っている相手にうまくつけ込んだという点では達人と呼べるかもしれないが。

（それに……本当は弱いこともわかってくれた。ロリーナは最高の親友）

思い返してご機嫌になる。

実は彼女にとってはこれこそが一番大きかった。強いと誤解されたままコミュニケーションをとるのは非常に苦痛であったのだ。怯え警戒する相手と話すのは常にピリピリとした緊張感があり、更にはバレた時にどうなるか考えただけでも胃が痛くなる。そこから解放されたのは本当に喜ばしいことだった。

実際には、弱いというのが失敗からの謙遜だと思われていることな

ど、アストリッドは露ほども想像していない。
（でも、どうしてロリーナは魔王に追われてた……？）
改めて考えてみると不可解な話だ。正直なところ、アストリッドから見て彼女がそれほど特別な存在であるようには思えなかった。着ていた服から考えると生前は貴族のお嬢様だったりしたのかもしれないが、今はただのか弱い幽霊である。わざわざ追っ手を何人も放つような理由が見当たらない。
ただ殺すことを楽しんでいただけで特に意味はないと言われればそれまでなのだが。
（……まあ、どうせアルキス死んでるし、どうでもいい）
雑に結論付けて考えるのをやめる。
そんなことよりも今はロリーナと話したい。鼻歌を口ずさみながらスキップで城の中を駆けていく。ロリーナのお気に入りの場所は図書室と中庭だ。どちらかに行けば会えるはず。
まずは図書室へと歩を進めていると――、目的地から轟音が鳴り響いてきた。
「――っ!? ロリーナ、大丈夫？」
慌てて部屋の中に入り、彼女の安否を確認する。
「あ、アストリッド様。すみません、うるさかったですよね」
「……何があった？」
ロリーナは傷一つなく立っていた。図書室も散らかっているような様子はない。何者かに襲撃されたのではと思っていたが杞憂だったようだ。しかし、それはそれで何が起こったというのか。
「新しい魔法を使ってみようとしたら、失敗して暴発しちゃったんです」
照れたように笑うロリーナ。見れば彼女は片手に魔導書を持っている。どうやら図書室に来ていたのは魔法の知識を得るためだったらしい。
暴発したというのに本棚に被害が及んだ様子がないのは、恐らく使った魔法が術者自身に作用するタイプのものだったからだろう。良識ある彼女が攻撃魔法等の周囲に影響を与えるものを室内で使う

とは思えないので当然だとは思うが、そんなことはアストリッドにはどうでもよかった。
「……ま、魔法……、使えるの……？」
「はい、簡単なものなら。なんとなく試してみたら成功したんです。生前は魔導師だったのかもしれません」
ロリーナは少し誇らしげに語る。その言葉を聞いて、アストリッドの顔色は真っ青になっていった。
（魔法を使える幽霊（ゴースト）って、魔力量どうなって……）
通常、幽霊は魔力を使った行動はできない。これは存在の維持に魔力の大半を費やしてしまうためである。その上で魔法を発動なんてできるのは一握りの優れた魔導師のみだ。
それだけでも十分驚異的だというのに、アストリッドはもう一つおかしなことに気が付く。
（……そういえば、本、ずっと持って……。読んでる……。幽霊が……？）
今までは特に気に留めていなかったこと。ロリーナが普通に本を手にして読んでいるという事実は、冷静に考えてみるとありえないことであった。
――幽霊は実体を持っておらず、物質に触ることができない。それは本来常識なのだ。
一応、魔力を使えば一時的に実体化できるので、その間だけなら触れられるが……。一瞬ならともかく長時間の実体化には極めて莫大な量の魔力が必要となる。本を読むなど以ての外だ。
そんなことを可能にするほど馬鹿げた魔力量。それは正しく――
（魔王、級……）
最上級の素質を持っているに他ならない。
もちろんアルキスに殺されている以上、あくまで魔王級の魔力を持っているだけで実力が伴っているわけではないのだろうが、それにしても異常である。
というか、よくよく考えてみれば魔王の手下達に五年も追われ続けて無事な奴が普通の幽霊なわけがない。それはまあ、アルキスに目を

付けられもするだろう。散々アルキス配下を怪物と言っていたが、ロリーナの方がよっぽど化け物であった。
「……？」
急に青ざめたアストリッドを見て首を傾げるロリーナ。以前ならば可愛らしく思えたであろうその動作も、真実を知った今となっては猛獣が獲物の様子を窺っているようにしか見えない。
（こっ、ころされ……っ。……ち、ちがう、ロリーナは友達……。そんなことしない……っ）
思わず疑ってしまいそうになるも、彼女の穏やかな人柄を思い出す。そう、いくら象とミジンコほどの力の差があるとはいえ優しいロリーナがアストリッドに対して横暴に振舞うなどありえない。
しかし、本当に全く危険はないのだろうか。もし何かのはずみで喧嘩になったら、衝動のまま八つ裂きにされるのではないか。そんな想像が頭から離れない。
（わ、わたし、本当は弱いこと教えちゃった……）
ロリーナは既にアストリッドの真の実力を知っている。自分は強いから戦っても無駄だとハッタリをかますのももはや不可能だ。
（……おわった）
絶望し天を仰ぎ見るアストリッド。いつにもまして表情が死んでいる。
そんな彼女の内心を全く察していないロリーナは、きょとんとしながら口を開いた。
「アストリッド様はこの魔法ご存じですか？　コツが全然つかめなくて……」
そう言って彼女は魔導書のとあるページを開いて見せてくる。アストリッドはそれが目に入った瞬間自分の脳が理解を拒むのを感じた。
（……これ、大魔法の一つ……）
気が遠くなる。なぜよりにもよってそれを習得しようとしてしまったのか。
『大魔法』とは、一撃で都市を一つ滅ぼす広域殲滅魔法や時間を巻き

戻す魔法など、規格外の効果を持つ魔法の総称である。あまりにも強力すぎるため禁忌に指定されていることも多く、中でも上位の魔法の危険度は魔王をも超えるといわれるほど。

とはいっても、そんなふざけた魔法を扱えるのは魔王や勇者、稀代の大魔導師くらいなもの。本来素人に毛が生えた程度の魔導師が使えるようになるなんて心配する必要ないのだが……。

アストリッドは目の前の少女を見る。

（使えそう……）

使えそうだった。

ただでさえ化け物染みた才能を持つロリーナがそんな凶悪な魔法を覚えたらどうなってしまうのか。想像するだけで震えてくる。

「この魔法、どうしても詠唱がうまくいかないんです。何度か繰り返してみたんですけど、いつも同じ結果になってしまって――」

「し、しなくていい」

そんな練習しなくていい。思わずアストリッドは口に出してしまった。慌てて誤魔化すように言葉を続ける。

「……それより、他にはどんな魔法を使える？」

「とりあえず、本棚のこの段にある魔導書はすべて」

そう言って彼女が指したところにあったのは入門から中級くらいのレベルのもの。数日で習得できるような量ではないが、彼女の才能からしてみれば可愛いものだ。流石に物騒な魔法ばかりを覚えているわけではないらしい。むしろ何故そこから一足飛びに大魔法にいってしまったのか。

呆れながらも、魔力を扱うことのできないアストリッドは少しだけ彼女のことが羨ましく感じた。

「何か、できるようになっておいた方がいい魔法ってありますか？」

尋ねられ、考える。アストリッドは特段魔法に詳しいわけではない。正確には魔導書はいくつも読み込んでいるので知識自体はあるのだが、その魔法がどの局面でどう有効なのか、実践的なことをまるで知らないのだ。

アストリッドでも有用性がわかり、尚且つ欲しているもの。そうな

るとやはり……、魔王やら英雄やらから逃走するのに使えそうな魔法になるだろうか。それならば心当たりがある。
記憶を探り、本棚から目的の魔導書を取り出して開いた。
「これ、とか……？」
「『ディメンジョン・ゲート』、ですか」
離れた空間同士を繋げ、一瞬で移動することができる魔法だ。どこまで遠くへ行けるかは術者の魔力依存だが、ロリーナならば使いこなすことができるだろう。
何より、『英雄』とやらに狙われた際の強力な逃走手段となりえる。とてもほしい。
それに、逃げる用としてだけではなく日々の生活でも便利使いできそうな性能をしている。かなり高位の魔法なので会得するのは難しいかもしれないが、その分リターンは大きい。寝室から一歩で風呂に行くことだってできる。なかなかいいチョイスではないだろうか。アストリッドは自画自賛する。
「わかりました。練習してみますね」
ロリーナもその利便性を認めたのだろう。頷いて魔導書を受け取った。

翌日、アストリッドはベッドの上で体を起こし、伸びをした。あくびをしながら目をこする。時計を見るともう昼過ぎだ。
昨日はあの後随分と話し込んで夜更かしをした。まさかロリーナがアルキスの部下から逃げるためにあんなスゴ技を開発していたとは。つい興奮して歓声を上げてしまった。
ロリーナが来てから毎日が楽しい。ここまで充実している日々は初めてだ。感謝の気持ちが溢れてくると同時に、彼女のことを怖がってしまったことを申し訳なく感じる。
冷静に考えてみれば、恐れる必要なんて何一つない。むしろ彼女は味方なのだから強くなることは頼もしく、歓迎するべきだろう。
（もっとたくさん、話したい……）
まるで恋する乙女のように、頬を赤らめて上機嫌で廊下を歩いて図

書室へ向かうアストリッド。
――すると突然、爆発音が聞こえてきた。
「ろ、ロリーナっ!?」
デジャヴを感じながら急いで見に入る。
果たしてロリーナは、やはり昨日と同じように何事もなく、けれど前とは違い晴れやかな笑顔をしていた。
「アストリッド様！　わかりました、そういうことだったんですね！」
「……？」
何がそういうことなのか。状況がさっぱりわからずにアストリッドは混乱する。
「この魔導書に書いてある詠唱が間違っていたなんて。詠唱をしなくていいと教えてもらっていなかったら、一生気づかなかったかもしれません」
「???」
そんなことを教えた覚えはない。いや、確かにしなくていいとは言ったが、それは詠唱ではなく大魔法の練習に向けてだ。意味が全く違う。
唖然とするアストリッドと対照的に楽しそうなロリーナ。
「とはいえ、無詠唱だとさすがに完全な発動までは持っていけませんから、正しい詠唱を研究する必要がありそうです」
やりがいのあることを見つけたと言わんばかりにワクワクした様子。その姿を見ていると気が抜けてくる。
まあ、大魔法も好きに覚えてもらって構わない。あの時は反射的に止めてしまったが、もしも英雄が襲撃してきた際に抵抗する手段が増えるのはいいことだ。死んだ目でロリーナを見つめながら思う。
「ロリーナ、気分転換、しない？」
しばらく彼女の実験に付き合ってから、アストリッドは提案した。
そろそろ集中力も切れてきたであろうロリーナへの気遣いだ。別に魔法に夢中なロリーナの興味を自分に引き戻したいなんて考えているわけではない。

「いいですよ。何をしますか？」
聞かれて返答に詰まる。二千年ものの引きこもりである彼女には、何が気分転換になるかの知識が備わっていなかった。
「……散歩、とか」
かつて読んだ小説の中で登場人物がそうしていたのを思い出して口に出す。ロリーナは了承し、森を歩くことになった。が、ここでアストリッドはあることに気が付いた。
（わたし、自分で城から出るの、何百年振り……？）
なにも二千年間全く外出をしなかったというわけではない。数日間別の場所を訪れることもあった。けれど、最後に自分の意思で外に行ったのがいつかと問われれば、即答できない程度には昔である。
何しろアストリッドは恐怖の大魔王だと思われている状態。どうせ誰かと会ったとしてもまともなコミュニケーションなど望めないので、出かける意味を感じられないのだ。
つい先日夜天会議（ティーパーティー）に拉致されたがあれは事故みたいなものだし、屋内への転移だったのであまり外に出たという感覚がない。
実はアストリッドは、今城の周りの森がどうなっているかすらよくわかっていない。ロリーナから少し様子は聞いたが、彼女もいろいろと追い詰められた状態での来訪だったはずなので、どこまで正確か怪しいものだ。
（……魔物がうようよいたらどうしよう）
森の中が安全かどうかが疑わしく思えてきた。あの森は古の賢者の魔法がかけられており、瘴気によって基本的に生物は寄り付けないようになっている。しかし、その魔法がいつの間にか解けていないとも限らない。実は化け物共が住み着いているのではないか、不穏な想像が頭をよぎる。
（散歩、何を持っていくべき……？）
危険があるとして、それに対抗するための手段。真っ先に思いつくのは武器だが、アストリッドが武装したところでたかが知れている。
そもそも頼りになる天才魔導師ロリーナがいるのだから、恐らく戦力面では問題はないだろう。

扱えないような道具を持って行っても無駄であるし、求められるのは簡単に使えてかつ危険に対して汎用性が高いもの。
（……！　回復用のポーション）
あらゆる怪我や病気に対して有効なあれさえあれば、吸血鬼の再生能力を上回るようなダメージを負ってしまっても生き延びられる。使った経験こそないが、飲むだけなのだから練習するまでもない。
そうと決まれば話は早い。アストリッドは保管庫へと取りに行った。

◇

「アストリッド様、どこ行ったんだろう……」
困惑するロリーナ。散歩に誘ってきたアストリッドは、用意するものがあると言ってどこかに消えてしまった。服でも着替えに行ったのだろうか。部屋の片づけをしながら想像する。
この城で暮らすようになってから、毎日が楽しいことばかりだ。命が脅かされることはなく、自分のやりたいことをやれる。一週間前までは、自分が笑っている姿なんて考えもしなかった。
あまりにも幸せで、アストリッドには本当に感謝していた。
けれど、だからこそ焦りが出てくる。
（足りないなぁ、私の実力）
最高の環境にいるからこそ見えてくる自分の不甲斐なさに歯噛みする。
そう、ロリーナは強くなろうとしていた。お世話になっているアストリッドに、守られるだけでなく共に戦い守れるように。彼女がまた、仲間を失わなくてもいいように。
しかし、その目標は遥か遠い。
もちろん、少し前までただ怪物から逃げることしかできなかった自分が、たった数日間で一端の魔導師になれたことは偉業だとはわかっている。だがそれは、
（成長してるんじゃなくて、元の自分に近づいてるだけ、だよね）

強くなってはいるが、ただ生前にできていたことを再現しているにすぎない。未だ記憶が曖昧なれど、そのことは強く自覚していた。

きっとこのままいけば、すぐに優秀な魔導師になれはするのだろう。しかしそこで頭打ちだ。生前に越えられなかった壁があって、きっとそれは今でも越えられない。

時間はある。それはわかっている。余程のことがなければアストリッドの守るこの城が危険にさらされることなんてない。だが、彼女は当たり前だと思っていた日常は簡単に崩れ去ってしまうことを、感覚的に知っている。

優秀なだけでは駄目だ。あのアルキスを小物扱いするようなアストリッドが、それでも仲間を守り切れなかったような、強大な敵。それは確かに存在するのだ。彼女の隣に並び立つには、もっと桁外れの力を手に入れなければ。

とはいえ、実力をつけるために手を出した強力な魔法も大した成果が上がっていない。アストリッドにヒントをもらったのにもかかわらず、まだ完成度は四割にすら届いていないのだ。しかもそこから進展する気配はゼロ。何をやっても届かない気すらする。

ましてや、その魔法を完全に身に着けたところでアストリッドの背は遠いのだ。もはや変な笑いすら出てくる。

（考えすぎ、なのかな……）

アストリッドが気分転換を提案してくるくらいだ。明るく振舞うようにはしていたが、きっと随分と追い詰められているように見えたのだろう。

「ふー。切り替え、切り替え」

自らの頬を叩き、思考をリセットする。せっかく散歩に誘ってくれたのだ。暗い考えを引きずるなんてナンセンス。

そもそも、まだここに来て一週間も経っていないのだ。普通に考えれば焦るような段階ではない。今は限界だと思っていても、存外簡単に壁なんて越えられるかもしれない。

アストリッドにすすめられたディメンジョン・ゲートは無事に習得することができた。今はそれだけでも良しとしよう。

（でも、ディメンジョン・ゲート、か……。やっぱりあれって、もしも何かあったときに、私だけでも逃げられるように、ってことだよね……）

確かにあの空間魔法は非常に強力かつ便利ではあるが、相応に魔力を消費する。そうそう連発できるような代物ではない。あまり積極的に多用する魔法ではない以上、あえて覚えさせる理由は有事の際の逃走用くらいだろう。

大事に想ってくれていることを実感しつつも、戦力としては頼りにされていないことを悔しく思う。彼女にとってロリーナは、守られる存在でしか――

（……って、違う違う。今はちゃんと気分転換しないと）

首を振って、暗く傾きかけた思考を引き戻す。

考え事をしているうちに、とりあえず一旦の片づけは終わった。アストリッドが戻ってくるまで手持無沙汰だ。

（それにしても、どうして散歩なんだろう。アストリッド様、あんまり家から出るの好きじゃないって言ってたのに）

あまり自分のことを語りたがらない彼女だが、そのことは教えてくれた。

（えーっと、確か、『意味がない』から外に出ないんだっけ。……あれ？　じゃあ今回の散歩は何か意味があるってこと？）

少し引っ掛かりを覚える。ロリーナのため、というなら意味はもちろんあるだろうが、気分転換ならば散歩以外の手段はいくらでも存在する。わざわざ苦手なことをする理由にはならない。

アストリッドが自ら出かけなければならない事情。……考えれば考えるほど怪しく思えてくる。何か裏があるのでは。

（いやいや、深読みしすぎだよね。アストリッド様は善意で言ってくれたんだから）

思考を打ち切る。流石に突飛な発想が過ぎるだろう。

自分で自分を笑っていると、アストリッドが戻ってきた。見ると彼女は袋を手に持っている。あれが散歩のために用意したものなのだろう。

「その袋、何を入れてるんですか？」
「……ポーション」
「……えっ」
　返ってきたのはあまりにも予想外な答え。なんとなく嫌な予感がしつつも、恐る恐る続けて質問する。
「……あの、どうしてそんなものを？」
「――――必要かも、しれないから」
（裏ある！　絶対裏あるよねこれっ!?）
　確信し、焦るロリーナ。なぜ散歩をするだけで回復薬が必要になるのか理解に苦しむ。
　まさか、この近くにアストリッドを傷つけられるほどの敵がいるというのか。戦々恐々とするロリーナ。一体これから何に連れていかれるのだ。
　急速に行く意欲がなくなりつつも、大恩あるアストリッドの言葉には逆らえない。ほどなくして二人は城を出て、外を歩き始めた。

　森の中を歩いて五分ほど。今のところは不穏な気配は何もない。ロリーナはほっと胸をなでおろしていた。
　きっと杞憂だったのだろう。アストリッドが過剰に心配性なだけなのだと、精神衛生上思い込むことにした。
　ロリーナはふと辺りを見まわし、疑問に感じていたことを思い出す。
「そういえば、この森って一日中暗いですよね。どうしてなんでしょうか」
「……吸血鬼（ヴァンパイア）は太陽の光を浴びると燃えるから、日光を遮る魔法がかかってる」
　かなり切実な理由だった。納得すると同時に驚きの感情が浮かんでくる。これほどの広範囲に機能する強力な魔法を使える人がいただなんて。術者はやはりアストリッドなのだろうか。尊敬の念を抱く。
　それに、幽霊も日の光が弱点なのは同じだ。偶然ながら都合がい

い。

他愛もない会話を続けながら歩いていると、突然どこからか妙な匂いが漂ってきた。

ロリーナは顔をしかめる。金属が発するそれに近いが、なぜか不快で生理的嫌悪感を抱く。どこかで嗅いだことがあるような。そう……、これは、

――血の匂いだ。

「っ！　ライト！」

咄嗟に魔法で明かりを灯す。幽霊も吸血鬼も夜目は利くが、明るい方が認識しやすいのは確かだ。

「……ぁ、誰か、倒れて……！」

異臭の発生元を見ると、そこには血塗れの獣人（ワービースト）が横たわっていた。

「大丈夫ですか！」

急ぎ安否を確認する。抱き起すと胸がかすかに動いているのがわかった。息はあるようだ。

しかし、見るからにかなりの重症。ロリーナの覚えている回復魔法で処置できるレベルを大きく超えている。一体どうすれば。

そうだ、アストリッドの方が有事の際の対応は慣れているはず。指示を仰ぐべきだ。

そう考え彼女の方を向き、――そして彼女が手に持っているものを見る。

（――ッ！　まさか……！）

信じられない可能性に思い当たる。ありえない、がそうとしか考えられない。

「……ポーションは、このために……!?」

「……」

沈黙は雄弁に肯定を語っていた。不自然な散歩の提案に不自然な持ち物。すべてはこれを見越してのことだったというのか。

心臓が早鐘を打つ。自分の理解を飛び越えた何かが起こっている。

――予感がした。何か大きなものが波のように揺れ動いて、多くを巻き込みながら始まっていくような、不思議な予感が。

◇◇◇

「喰らいやがれ――！　烈・覇断!!」

大剣を用いて繰り出される必殺の一撃。その一振りは、落雷のような轟音とともに敵軍の兵士を千人単位で消し飛ばした。確かな手応えを感じる。だが、

（――チッ。何人殺しても新しく湧きやがる。一体どうなってんだ、コイツらは……！）

まるで敵の数が減るような気配はない。夥しい数の敵兵士は、空を埋め尽くすかのように無尽蔵に浮かんでいる。

アルフォード王国北西部にて。〝深紅き咆哮（レッド・ファング）〟ロクサス・アルフォードは正体不明の軍勢と対峙していた。